

臨床中毒学

相馬一玄 監修

上條吉人 執筆

＜書評者＞ 森脇龍太郎（千葉労災病院救急・集中治療部）

上條吉人先生は、わが国で最も先進的な急性中毒の診療および研究を行っておられ、また学会などでもオピニオンリーダーとして華々しく活躍されている。臨床中毒学を専門とする者で、先生の名前を知らない者はいないと言っても過言ではなく、間違いなく今後の日本の臨床中毒学を背負って立つ人材の1人である。

数年前、同じ医学書院から出版された先生の著書『急性中毒診療ハンドブック』は、簡潔明瞭にエッセンスがまとめられていて、またおのおの中毒のメカニズムについても強調されており、さらには今まで業界には存在していなかったメモニクスによる記憶法なども編み出され、大変ユニークで親しみやすい内容であった。今回その精神を踏襲しながら膨大な加筆をたった1人で行われて完成したものが、この『臨床中毒学』と思われる。本の体裁がハードカバーで、今までの先生の著書と違って、いかにもいかめしい印象を受けたが、内容を拝見すると、臨床医にもわかりやすい明瞭な解説・図表の数々、結局のところ今までのアプローチとまったく同じであることに安心した次第である。

先生は現在、中毒学を中心とする救急医学を専門とされているが、医師になって数年間は精神科学を履修され、また医学部に入学される前には化学を専攻されていたと聞く。しかも、しっかりとその大学を卒業されているのである。本書の構成は、定番どおり「総論」「各論」の構成であるが、「総論」では、「全身管理」「吸収の阻害」「排泄の促進」「解毒薬・拮抗薬」の従来の急性中毒の4大原則に「精神科的評価と治療」を加えて5大原則とされたことは、いかにも先生らしいアイデアであり、急性中毒患者の大部分は自殺企図であることを考えると、至極最もなコンセプトと思われる。

「各論」では、多岐にわたる中毒物質の中から、頻度・重症度を鑑み、これだけはあると思われる101の中毒物質をピックアップし、おのおの物質について、まず「Minimum requirement」にて最重要事項を提示し、「治療のフローチャート」にて治療の概要を簡潔に示されているが、多忙な日常診療においてはこれだけでも大いに役立ち、大変重宝されよう。次いで「概説」「中毒のメカニズム」「臨床症状」「診断」「治療および

予後」などの項目を設け、詳細に解説されている。特に「中毒のメカニズム」では、臨床症状と関連付け、そのメカニズムをわかりやすく述べられていることは本書の特長の1つで、臨床症状を理解するうえで大変参考となる。また「治療および予後」で、解毒薬・拮抗薬の作用機序から投与方法まで詳細に記載されている点は、日常診療において大いに役立つものである。さらに「症例呈示」では、実際に経験された症例が呈示されているが、その緻密な診療内容は臨床医にとってよいお手本となるに違いない。そして「付録」として、『急性中毒診療ハンドブック』からの伝統であるメモニクスによる記憶法が満を持して登場している。

この『臨床中毒学』は、まさに臨床的かつ実践的であるが、中毒のメカニズムと臨床症状との結び付きを理解しやすいように工夫されており、本書を読破すればいっばしの急性中毒の専門家であり、大部分の急性中毒診療は自信を持って行うことができること請け合いである。現時点での急性中毒学のバイブルであると言っても過言ではなからう。

●B5 頁576 2009年
定価10,500円
(本体10,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00882-2]
医学書院刊